

## 鞠智城出土・銅造菩薩立像についての考察

熊本県教育委員会  
村上幸奈

鞠智城跡出土銅造菩薩立像（以下、本像）は、平成 20 年（2008）10 月、熊本県山鹿市・菊池市に所在する鞠智城跡の貯水池跡底部から出土した総高約 13 センチメートルのごく小さな仏像である。本研究では、本像の制作年代について再検討し、造形的特徴の一つである持物の問題と制作背景について考察を行った。

まず、本像に関する先行研究を概観し、白鳳時代に制作された宝珠捧持形菩薩の一例に位置付けられていること、制作背景として山城の祭祀に関連する遺物や百濟系渡来人の念持仏であった可能性が想定されていることを整理した。

次に、令和 4 年（2022）9 月に行った調査の結果をもとに本像の造形的特徴を挙げ、類似作例との比較から、本像の制作年代については白鳳時代を基準とできると推定した。

これまで本像については、特殊な持物の形態と執り方から、宝珠捧持形菩薩という枠組みの中で検討されることが多かった。しかし、国内外に現存する同形式の菩薩像や、宝珠及び舍利容器の実際の作例との比較を行ってみると、本像を宝珠捧持形菩薩の一例であるとは必ずしも断定できない可能性が浮上した。

そこで、改めて本像の持物と手元について検討を行ったところ、新たな持物の解釈として瓶型の容器である舍利瓶と水瓶が挙げられた。舍利瓶は舍利を直接入れる重要な容器で、舍利容器の最奥に籠められることから一般に目にできる者は多くなかったと想定される上、舍利瓶を執る仏像の作例は現状確認できない。一方、水瓶は僧侶の日常的な携行品として使用されており、水瓶を執る仏像が古くから制作されていたことからも、菩薩の持物として一般に認識されていたと考えられる。以上により、本像の持物を水瓶と推定した。

本像が出土した鞠智城跡貯水池跡については、先行研究で飲料水の確保や貯木場のほか、水勢の制御という役割を担っていたことが想定されている。古代山城の維持管理において水勢の制御は大きな課題であったと考えられ、当時の人々が山城での水害への恐れを克服するためや、水害で亡くなった人々への追善のために神仏の力を借りようとするのは自然なこととも考えられる。本像については、従来の見解である宝珠捧持形菩薩という枠組みから一度離れることで、鞠智城における貯水池の造営を背景に、水瓶を腹前で持つ菩薩像として制作された可能性も浮上してくると言えるのではないだろうか。

第11回鞠智城跡「特別研究」成果報告会  
令和5年（2023）3月5日（日）於くまもと県民交流館パレア

## 鞠智城出土・銅造菩薩立像についての考察

熊本県教育委員会  
村上幸奈

### 発表構成

- 1 作品概要
- 2 先行研究の整理
- 3 制作年代の推定
- 4 宝珠捧持形菩薩についての検討
- 5 制作背景についての考察

### 1 作品概要

#### 鞠智城跡出土銅造菩薩立像

総高 12.6cm 像高（髻～台座蓮肉縁）10.4cm 像高（頭飾頂～台座蓮肉縁）10.6cm  
銅造（一鋸 無垢 鎏金の状況は不明）

平成20年（2008）10月23日 鞠智城跡貯水池跡底部の土中から出土。  
現在は熊本県立装飾古墳館が所蔵。



鞠智城跡出土銅造菩薩立像（発表者撮影）

## 2 先行研究の整理

### ○大西修也氏

本像の制作年代について、三面頭飾や簡略化された天衣の表現形式等から、白鳳時代の菩薩像に共通した作風を示すとした。

また、本像の持物を円筒舍利容器と解釈し、両掌の上に持物を載せる形式は、朝鮮三国時代の百濟仏や飛鳥・白鳳仏に作例の多い宝珠捧持形菩薩との密接な関係を伺わせるものであるとして、中国南朝系の舍利供養菩薩が確認されている百濟系仏像の一例と位置付けた。鞠智城が七世紀に築城された朝鮮式山城の一つであるとの指摘があることからも、本像は百濟からの渡来人によって鞠智城に持ち込まれた念持仏で、個人的な供養を目的として制作された可能性を示した。

### ○矢野裕介氏

本像は出土状況から原位置を保っていないことが明らかであり、仏像という遺物の性格上、廃棄されたとは考え難いとした上で、近隣に仏堂があったか、地鎮等の祭祀に関連する遺物であった可能性を提示した。その理由として、貯水池跡池尻部から約二〇〇メートル谷下に位置する「飛渡」に鞠智城の北外郭線が通っていること、さらにその谷筋には地形的な理由から城門などの施設が推定されていることを挙げた。池尻部における池の排水量の調整は、城の維持管理の要所であったと考えられるという。

### ○有働智哉氏

六世紀の百濟で舍利信仰が隆盛し、觀音信仰も付隨して日本へ伝播したことを取り上げ、本像が鞠智城跡で出土した背景には百濟から伝播した菩薩信仰がある可能性を述べた。また、古代肥後における初期仏教は六世紀半ばから在家仏教の形態で百濟から伝來したものと推測し、本像は念持仏として個人の邸宅に安置された仏像であるとした。

### ○イ・ジャンウン氏

本像の造形が百濟系仏像に類似することや、「秦人」銘木簡や男性器型の木製品とともに貯水池跡から出土したことに注目し、鞠智城の貯水池が山城の祭祀と関連していた可能性を示した。

- ・ 白鳳時代の作例と推定されている。
- ・ 制作背景については、百濟からの渡来系氏族の念持仏として制作された可能性のほか、貯水池跡の出土地点や他の遺物との関係から、山城の祭祀との関わりがあった可能性も示されている。
- ・ 宝珠捧持形菩薩の一例とする見解を前提として考察が行われる傾向がある。

### 3 制作年代の推定

- 頭部、面相部　　頭部が体に比して大きい造形、三面頭飾、明るい表情
- 姿勢　　肩を引いて腰を大きく突き出すことで、体全体がS字形を描く姿勢
- 天衣　　後方に向かって弧を描いた天衣の先端部分を蓮台上に載せる形
- ・ 七世紀半ば～後半に製作された他作例と共に通する造形的特徴を示すことから、本像の制作年代については白鳳時代を基準とできると思われる。

### 4 宝珠捧持形菩薩についての検討

#### **宝珠捧持形菩薩**

腹前もしくは胸前で宝珠やそれに準ずる容器を両手で捧げ持つ菩薩像

#### ○先行研究

- ・ 図像の源流と尊格に関する研究が主として行われてきた。
- ・ 源流については、主に中国と西方の二説ある。
- ・ 「宝珠」捧持形菩薩と称するものの、必ずしも宝珠を執っている必要はなく、有蓋の容器等を執るものも同形式に含むとする見解が多く見られた。
- ・ 尊格は、弥勒信仰に関わる観音菩薩または初期の観音菩薩と位置付ける説がある。

#### ○他作例（中国、韓国、日本）との比較

- ・ 大半の作例が上下から持物を包むように執る。
- ・ 本像と同様の手元（両掌で持物をすくうように執る）を示す例は、奈良・法隆寺聖霊院聖徳太子坐像胎内觀音菩薩立像のみであった。
- ・ 持物については、宝珠と思われる球状の持物や有蓋の丸い容器を執る作例が主流であり、円筒状部分の下に末広がりの台がある持物を執る例は見られなかった。

#### ○宝珠と舍利容器

#### **宝珠**

真珠、宝物の意味を持つ「摩尼」を訳した「摩尼宝珠」のこと。また、想像上の宝物、意のままに物を生ずる珠玉を意味する「如意摩尼」とも呼ばれる。

縦長の六角形から球状の宝珠に変化し、やがて葱花形のものへと変化した。あくまで球状のものと認識されていた可能性が高い。

#### **舍利容器**

仏陀の骨である仏舎利を入れる容器で、仏塔内部または心礎下に安置される。

形状や材質は国や時代により様々だが、豊かな装飾を施した入れ子状の容器が多い。なお、円筒状部分の下に末広がりの台がある作例は、現状確認できない。

## 5 制作背景についての考察

### ○持物の問題について

- ・ 宝珠捧持形菩薩という枠組みから一度離れて本像を見た場合、舍利瓶もしくは水瓶である可能性が浮上した。

**舍利瓶** 舍利容器の内部に籠められる容器で、仏舎利を直接入れる重要な部分。

**水瓶** 水を入れる容器。僧侶の携行品から仏具として用いられるようになった。

- 和歌山・那智経塚出土観音菩薩立像（東京国立博物館蔵）
- 大分・羅漢寺観音菩薩立像
- 中国・敦煌莫高窟第285窟北壁 二仏並坐像脇侍菩薩像

### ○鞠智城跡貯水池跡について

- ・ 国内の古代山城のうち、明確な状態で貯水池跡が確認されているのは鞠智城のみ。
- ・ 建築材を保管し供給する貯木場や、飲料水を確保する貯水池としての機能があったと考えられる。
- ・ 谷の地形を最大限利用しながら造営され、水勢の制御を担った。
- ・ 本像のほか、意図的に定置された平瓶や破損した土器片等、祭祀行為に関連する遺物が複数出土している。

### まとめ

- ・ 先行研究において、本像は白鳳時代に制作された宝珠捧持形菩薩の一例に位置づけられている。また、制作背景として山城の祭祀に関連する遺物や百濟系渡来人の念持仏であった可能性が想定されている。
- ・ 調査結果をもとに造形的特徴を挙げ、類似作例との比較から、本像の制作年代については白鳳時代を基準とできると推定した。
- ・ 国内外に現存する宝珠捧持形菩薩やその周辺作例との比較、宝珠及び舍利容器の作例との比較を行ったところ、本像の造形については宝珠捧持形菩薩という枠組みから一度離れて検討を行う必要性が出てきた。
- ・ 改めて本像の持物と手元について検討を行ったところ、新たな持物の解釈として、瓶型の容器である舍利瓶と水瓶が浮上した。また、それぞれの実際の作例との比較により、本像の持物は水瓶であると推定した。
- ・ 本像の出土地点である鞠智城跡貯水池跡は、飲料水の確保や貯木機能のほか、水勢の制御という役割を担っていたことが想定されている。
- ・ 本像は七世紀後半における鞠智城貯水池の造営を背景に、腹前で水瓶を抱える菩薩像として制作された可能性もあると言える。